

韓国の祖先祭祀における儀礼食の特徴と共食 —忠清南道一両班村落の事例を中心に—

Ritual food characteristics and common meal at Korea's ancestor rites

林 在圭

文化政策学部国際文化学科

Jaegyul LIM

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

韓国における伝統的な儀礼は年中行事と通過儀礼に大別される。こうした年中行事や通過儀礼は人々の生活に癒しの休息と活力を与えてくれる。また年中行事や通過儀礼などの諸儀礼の過程では、特別季節料理がご馳走として調理され、四季折々の食物とともに豊稔祈願・家内幸福・厄払いなどの願いをこめて、あるいは祖先崇拜の象徴として供物が供えられる。それゆえ、儀礼食の供物は霊や神と人間との関係性における媒介の役割を果たしている。

韓国の祖先祭祀は儒教の大伝統に則って、儒教の教えを行為に表した典型的な儀礼として、祖先祭祀を行うことによって、その教えを体得することができ、それが社会的評価にもつながる。そのため、韓国人にとって祖先祭祀を祀ることが重要な生活規範になっている。

特に祭祀供物には韓国文化の歴史的経過とその特徴が反映されており、肉や魚料理をはじめ餅や果物などが供えられる。したがって祭祀供物を通して、日常の食事ではほとんど食べない肉料理や魚料理を中心とした良質の動物性蛋白質を摂取しうる機会を得ることができる。

Traditional formal events in Korea are divided into annual events and rites of passage. These annual events and rites of passage provide vitality and rest for recovery in people's lives. Also, in the processes of formal events such as annual events and rites of passage, special seasonal cooking is prepared as feasts, and with foods of the four seasons, there are prayers for a good harvest, family blessings, rid evil, etc., or offerings are presented as symbols of ancestor worship. In addition, offerings of formal foods play an intermediary role in the relationship between spirits and gods with people.

According to Confucian tradition, Korea's ancestor worship events are typical formal events expressing Confucian teachings in actions. By holding ancestor worship events, people can experience its teachings, and it also leads to social regard. Thus for Koreans, holding ancestor worship events is an important lifestyle norm.

The historical process and characteristics of Korean culture are especially reflected in ritual offerings, with offerings of meat and fish dishes, rice cakes and fruit. Thus through ritual offerings, people can gain chances to obtain good quality animal proteins which are rarely eaten as everyday foods, especially meat and fish dishes.

はじめに

韓国における伝統的な儀礼は、いわゆる冠婚葬祭⁽¹⁾の通過儀礼と歳時風俗の年中行事とに大別される。冠婚葬祭は人の一生の節目に行われる儀礼習俗である。特に儒教を国是としてきた朝鮮王朝以来の元服・婚礼・葬儀・祖先祭祀の冠婚葬祭に関する儀礼はとりわけ重視されてきた⁽²⁾。他方、歳時風俗は旧暦の月別に24節気と伝統的な祝日の名節^{명절}(節句)に区分され、共通の集団的に集落ごとまたは家ごとにあるいは民族ごとに伝承されてきたもので、1年を周期に繰り返されている儀式・遊戯の慣行である。しかし、戦後の都市・産業化に伴ってその多くは喪失してしまった。今日では、元旦のソル名節(旧暦1月1日)と秋夕名節(旧暦8月15日)だけが盛大に行われ、韓国の2大民俗行事として帰省のための民族大移動を引き起こす。

こうした冠婚葬祭や歳時風俗は人々の生活に休息と活力を与えてくれる。また、これらの諸儀礼の過程では、四季折々の特別料理がご馳走として調理され、豊稔祈願・家内平安などの願いを込めて、あるいは祖先崇拜の象徴としての盛大な供物が供えられ、共食が行われる。そのため、冠婚葬祭や歳時風俗などの儀礼食(供物)の共食は、神や霊と人との関係性のみならず、人と人との関係の紐帯を維持強化する機能をもつ。

ところで、従来の儀礼研究では儀礼食を文化や社会構造

との関係でとらえる視点は欠けていた。そこで本稿では、韓国忠清南道唐津郡D里⁽³⁾に本拠地をおく宜寧南氏忠壮公派門中(以下、忠壮公派門中と略称する)の祖先祭祀における儀礼食を中心に、祭祀供物の特徴と共食による村落統合機能を究明し、祭祀儀礼食の食文化特性の一端を明らかにしたい。

1 祖先祭祀

韓国における儀礼は、既述したように冠婚葬祭(通過儀礼)と1年の節日の節気や名節に行われる歳時風俗(年中行事)とに大別される。通過儀礼は人の一生における祝いや弔い・供養として重要であるばかりでなく、地域社会における結合や一体感の再確認、紐帯の維持強化という観点からも非常に重要である。特に初誕生祝い・婚礼・還暦祝あるいは70歳の古希祝や80歳の八旬祝(写真1)と、葬儀や祖先祭祀はその両側面から重要な行事であり、現在でも盛大に行われている。

他方、歳時風俗は1960年代以降の工業・産業化に伴ってそのほとんどが喪失し、旧暦1月1日のソル名節と旧暦8月15日の秋夕名節行事だけが、韓国の2大民俗行事として継承されている。この両2大名節行事は、特に「茶礼^{차례}」と呼ばれ、祖先祭祀の祀りでもある。一般に冠婚葬祭の儀礼には、お祝いの「チャンチ」(慶事)共食と、

祖先祭祀の「飲福」(直会の共食)過程が含まれている(写真2)。したがって、儀礼時には家族や親族のみならず地域社会の住民たちも巻き込んで盛大な共同飲食が行われることが多い。そのため、韓国における食生活を理解するためには日常食だけでなく、儀礼食の考察は欠かすことができない。そこで本研究では、諸儀礼の中でも韓国の祖先祭祀を取り上げ、実証研究を通して、その特徴と共食について考察する。

韓国における祖先祭祀は、儒教の『朱子家礼』⁽⁴⁾の祭祀に基づき、朝鮮時代以来の儒教式の祭祀として今日に至っている。したがって、祖先祭祀は儒教の根本理念である「孝」の延長として見なされており、儒教式祭祀には酒を捧げる「献酒」と盛大な食事のもてなしが重視されている。この考え方は先祖に対する観念にも影響を与え、先祖は永遠にその個性が浄化されるのではなく、崔吉城が指摘したように「死んだ生き人」(崔吉城1993:92)として人格を喪失しないものとして認識されている⁽⁵⁾。したがって、人々はいつまでも個性を持ち続ける先祖に対して供物を捧げ、祖先との儀礼的共同飲食を行い、祖先との交流をはかっている。

祖先祭祀は、これまで四時祭・忌祭・茶礼・時祭の4つに類別され祀られてきた。四時祭とは春夏秋冬の各季節の仲月である2月・5月・8月・11月に適切な日を選んで祀る祖先祭祀であるが、近年になってこの四時祭は祀らなくなった。現在、当該村落(忠清南道唐津郡D里)でも忌祭・茶礼・時祭の3種のみが祀られている。

次に忌祭は直接子孫たちによって、父母から4代祖(「高祖」と呼ぶ)までの先祖に対して毎年の忌日(命日)に家で祀られる祖先祭祀である。忌祭の対象となる先祖が4代祖までの先祖であることから「四代奉祀」と呼ばれる。茶礼は毎年のソルや秋夕などの名節に、すべての忌祭の対象先祖に対して家や祠堂で祀られる祖先祭祀である⁽⁶⁾。他方、時祭は忌祭が終わった5代祖以上の先祖に対して、それぞれの墓で行われる祖先祭祀である⁽⁷⁾。特に時祭は父系出自集団の門中が組織的にとり行うため、こうした祭祀システムによって父系親族集団である宗族が組織化され、門中が形成されている⁽⁸⁾。その結果、祖先祭祀を契機として門中成員間の紐帯や結束が強化・再確認される(写真3)。

忌祭は4代祖までの先祖を対象に毎年それぞれの忌日に祀られるため⁽⁹⁾、祭主である長孫にとっては、少なくとも1年に8回以上の高祖父母・曾祖父母・祖父母・父母の祭祀を祀る義務を負う⁽¹⁰⁾。また、忌祭の対象先祖には茶礼も祀られる。茶礼は歳時風俗の名節に祀られる祖先祭祀の総称である。元来、茶礼は土着信仰に基づく先祖神の祖霊を祀る年中行事であり、そのため「節祀」とも呼ばれる。現在、名節のうち最も広く行われているのが、旧暦1月1日のソル名節と旧暦8月15日の秋夕名節であるが、その他にも地域や家によっては寒食・端午・重陽節・冬至などにも茶礼を祀る。一般に南部地方の稲作地帯ではソルと秋夕が重要な名節であるのに対して、北部地方の畑作地帯では端午節(旧暦5月5日)と重陽節(旧暦9月9日)に茶礼が祀られることが多い。しかし1985年以降ソルと秋夕が「民俗の日」として祝日に制定され、全国的な名節として確立されたため、北部地方の畑作地帯でも秋夕茶礼が



写真1 80歳の八旬祝



写真2 祖先祭祀の飲福(直会の共食)



出典) 国立文化財研究所より

写真3 門中による時祭

一般化している。茶礼は朝か昼にかけて行うが、父系親族の近親が集まって4代祖の代々の長男の家である宗家から順番に行く。茶礼の儀礼過程は地域や家によって若干異なるが、ほとんど忌祭の祭儀過程と変わらない。ただし、茶礼では祝文(祝詞)もあげず、初献・垂献・終献の3回のお酒を捧げる祭儀(献酌)を1回のみとする「無祝単献」が特徴である。そして、茶礼の飲福の後にはお墓参り(「省墓」と呼ぶ)をする。またソル茶礼には省墓後に生者に対する年始回りの年賀(「歳拜」と呼ぶ)が伴う。

茶礼には必ず特別な供物(「別饌」と呼ぶ)、すなわち季節物や初物(「節饌」と呼ぶ)を供えることになっている。



出典)「安東潭庵公派墓祭」光山金氏資料より
写真4 先祖のお墓の前で祀る墓祭



写真5 門中の下位小グループの共同墓地(榴谷墓園)



出典)「安東潭庵公派墓祭」光山金氏資料より
写真6 時祭の飲福(直会の共食)

朝鮮時代の代表的な礼書のひとつである『四礼便覧』によると、別饌や節饌の種類は冬至の小豆粥、元旦の湯餅(トックック)、秋夕の松餅(ソンピョン)が定められ、その他に菓飯・艾餅・角黍(蔓草の葉でもち米餅を包んだあん餅)・蒸餅(シルトック)・水団(団子)・霜花(きび餅)・棗栗

羔(棗と栗を混ぜた白餅のベックソルギ)・煎菓・獺肉などがあげられる。

忌祭や茶礼の祭祀権継承は、代々長男すなわち嫡男の出自ラインに沿って、永代に継承されるのが理想とされる。4代祖の高祖を頂点とし、祭主は嫡系長男の玄孫に当たる長孫になるが、彼を特に「宗孫」と呼ぶ。これらの祭祀に参加する者すなわち参記者は、高祖を共通先祖として分岐した傍系の玄孫までの、父系出自成員たちである。この集団を「堂内」と呼ぶ。祭主である宗孫が死亡すると、それまでの4代祖(高祖)は5代祖となり、3代祖であった曾祖が4代祖にせり上がり、忌祭の代替わりが行われる。こうして5代祖は忌祭の対象から後退し、時祭の対象である先祖たちの一員に加えられていく。こうした四代奉祀は祭主(宗孫)の世代交代が基点となって嫡長男4代という原則となっている⁽¹¹⁾。

一方、忌祭が終わった親尽⁽¹²⁾先祖に対しては、位牌(神主・神位)を当該先祖の墓に埋め、年に1回の時祭を祀る。時祭は「時享」とも呼ばれ、各堂内の宗孫を基点にして5代祖以上の先祖が対象となる。時祭は旧暦10月のうちに5代祖以上の各先祖に対して門中で定められた日に相互に重ならないように、名々の先祖の墓前で行うので「墓祭」とも呼ばれる(写真4)。忌祭や茶礼がそれぞれの家ごとに行うのに対し、時祭は門中が中心となって行う。

時祭の対象は、一般に始祖(あるいは派祖)以下5代祖以上のすべての先祖が対象となる。したがって、時祭の対象先祖は膨大であり、そのため門中によって組織的に行われる。かつては墓が地理的に散在していたために1カ月以上を要することもあった。こうした理由もあって、近年では下位小門中ごとに当該先祖の墓を1カ所に集め、共同墓地化をはかっている⁽¹³⁾(写真5)。こうした共同墓地化とともに、かつては先祖(墓)ごとに行われていた時祭も、合間で済ませることもみられる。しかし祭祀は1回で済ませても、儀礼過程では「礼を失する」といって、供物のうち御飯の飯とスープの羹は先祖の数だけ供えるところも多い⁽¹⁴⁾。忌祭や茶礼も同様であるが、特に時祭の飲福(直会の共食)は盛大に行われる。かつての時祭の飲福には門中成員のみならず、近隣住民も大勢集まって共同飲食に預かっていた(写真6)。

このように忌祭は4代祖までの先祖の忌日を追悼する儀礼であり、時祭は5代祖以上の先祖を対象に墓で追悼する儀礼である。一方、茶礼は先祖に月や季節、年の移り変わりを告げ、別饌や節饌を薦新する儀礼である。そのため、茶礼は忌祭や時祭とともに重要な祖先祭祀のひとつとして数えられ、茶礼が祀られる名節には遠散している一族(宗族という)が宗家に集い、様々な民俗ノリ(遊戯)も行われ、宗族の紐帯を再確認・強化する契機にもなっている。

2 祭祀供物

(1) 祖先祭祀の供物

忌祭・茶礼・時祭の3種の祭祀は、その儀礼過程や供物などに対する考え方には概ねその違いが認められない。しかし祭官の規模や参加人数、供物の量などにおいては若干異なることもある。

祭祀に使われる供物は特に「祭需」と呼ばれ、祭需に使

われる料理は決められている。調査対象村落のD里では、祭需の準備は祭礼日の1週間程前のキムチ漬けから始まる。祭需の買い出しは、宗孫（家長）が自ら祭祀の2日・3日前に行うのが一般的である。当該地域では祭需はもちろん、普段のおかずの買い出しも男性が行うことが多い。それは主に男性たちは市場に用が多く市場によく出掛けるという便宜的な理由もあるが、王朝時代の家族制度における伝統的な性別分業や役割分担の影響によるものであるとみられる。

そして、祭礼日の前日には朝から家族や兄弟や傍系親族の妻たちが宗家に集まって料理の準備を行う。夕方頃になると傍系親族の男衆が宗家に集まって祭需の準備にとりかかるが、これを特に「果房」と呼ぶ。男衆は主として栗剥き、松の実、クルミ、菓果などの供物を「祭器」に盛り付けをする。

祭需の供え方（「陳設」）には固有の規範があって、高盛にするが、これを「高排」と呼ぶ（写真7）。祭需の料理は女性によって調理されるが、陳設以降の儀礼過程では男性だけで行われるのが常である⁽¹⁵⁾。これが儒教式祖先祭



写真7 祭祀供物（祭需）の高盛

祀の大きな特徴のひとつである。図1は、当該村落の忠壮公派門中の草分け（派祖）以来の代々の長男家である大宗家所蔵の『宜寧南氏忠壮公派宗会規約』（1988）に記載されている「忌祭祀兩位陳設図」である。

図1によると、位牌はひとつの祭膳（祭床）に夫婦兩位を祀るが、祭床に向かって、左側に父や祖父といった男性先祖を、右側に祖母や曾祖母といった女性先祖を祀る（男左女右）。祭需の数は縦4列・横8列（一般的には縦5列、横7列が多い）の計32品が供えられるが、全品揃わない時もある。祭需の陳設は祭床に向かって、最前列の左から棗・栗・梨・柿・真瓜・水瓜（西瓜）・油果・糖果の順に供えられる。2列目は、左から脯（干物）・熟菜・煎（チヂミ）・佐飯（佃煮）・清醬（醤油）・海衣（海苔）・醃（甘酒）・沈菜（キムチ）の順に、3列目は左から肉（茹でた片肉）・肉奠・鶏卵・炙（串焼き）・魚奠・豆腐・餅・清（蜂蜜水飴）の順である。最後列に左から飯・羹（スープ）・盞（盃）・盞・匙牒（匙箸入れ）・酢・飯・羹の順に供えられる。

こうした陳設にみられる規則は下記の通りである。まず第1に最前列の果物は左から天果・地果・造果の順、すなわち棗・栗・梨など木になる果物（天果）、次に西瓜や瓜のような土でとれる果物（地果）、そして餠子・茶食などの人が作った菓子（造果）の順に供えられる。第2に「ソコルイシ」のルール、すなわち棗・栗・梨・柿の順に供える。また地域によっては赤い果物は東、白いものは西に供えるという「ホンドンベツ」のルールに従うところもある。第3に、「ソフヘ」すなわち脯は左に醃は右に供え、「ソトスツ」すなわち生物は東に火を通した物は西に供える。第4に、「ソドスツ」すなわち魚は東に、肉は西に供えるルールである。こうしてみると、左（西）側に格の高いとされるもの、より良いとされるものを供えることがわかる。肉類は魚類より良いものとされており、炙は肉（牛・豚）・鶏・魚類の順に、その格式の序列が付けられている。第5に、「ソバンソグン」すなわち位牌を基準に御飯は右側にスープの羹は左側に供えるルールである。これは生者に対する日常

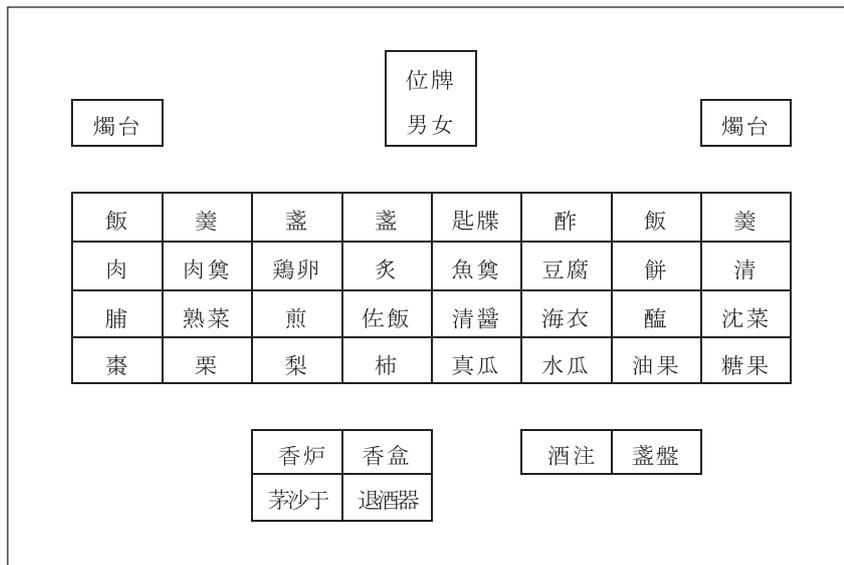


図1 忠壮公派門中の忌祭祀兩位陳設図

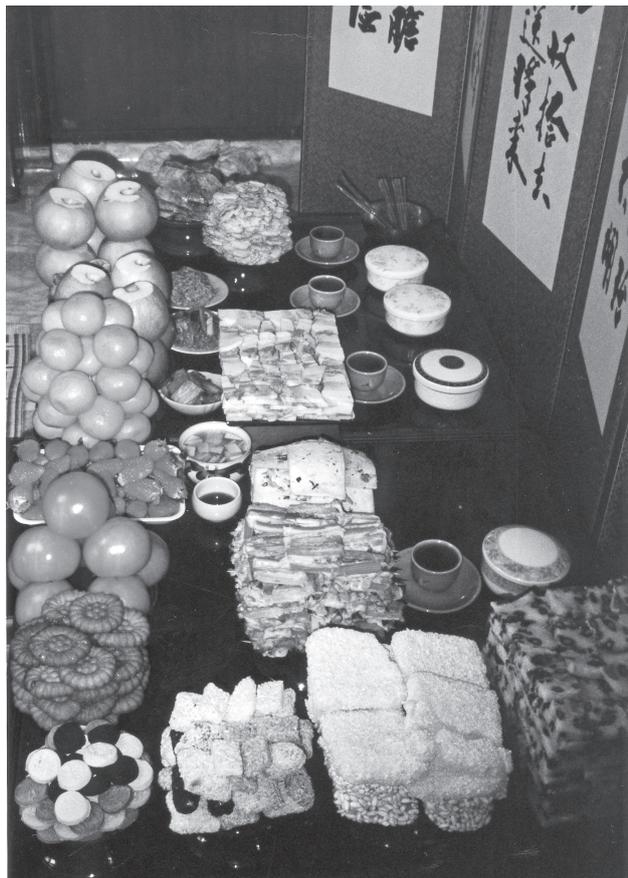


写真8 忌祭の祭需陳設

とは逆さまになっている。ところで、こうした陳設における規則や祭需の数は原則的なものであって、実際には必ずしも規則とおりではなく、状況に応じて柔軟性をもっている(写真8)。

祭需陳設の特徴である高盛は権威を象徴するものであり、孝の表現でもある。祭需陳設の供物の序列は儒教社会における位階秩序の投影であると思われる。

(2) 祭需の意味と調理時の留意

祭需には酒・果・脯・醢を基本とし、餅・炙・煎・湯・ナムル・キムチ、そして飯・羹などを供える。今日では、酒を各家庭で醸すことは少ないが、かつては各家庭で清酒を醸造していた⁽¹⁶⁾。果には生果・乾果・造果(油果)(あるいは天果・地果・造果)に分けられ、果は菓子類を含む果物の総称である。果物の栗・棗・柿・梨は祭需として欠かせないもので、その他に季節によって林檎・西瓜・瓜・蜜柑なども用いられる。また棗と柿は季節によって干した乾果が用いられることが多く、それ以外は生果が用いられる。生果は特有の調理法(手入れ)が用いられるが、特に栗は生栗を使わなければならないが、皮を剥いた生栗を水につけ、重ね盛りができるように両側を平らにし、周囲を斜めにカットするが、これを「栗チギ」という。また林檎や梨などの生果は上下を少しだけカットして重ねやすくし、ヘタの方が上になるように重ねる。生果の上下をカットするのは高盛のためでもあるが、その民俗的意味は霊や神が食したという表象であるといわれる。なお柿は大臣の器の子孫が生まれるよう願いが込められて

いるもので、棗は聖賢が生まれるよう願いが込められている。また栗や棗は子孫繁栄の意味も込められている。梨は知恵を、林檎は慈悲や愛を意味する。

他方、造果(または油果ともいう)は菓果・餛子・茶食などがある。菓果は蜂蜜や水飴に小麦粉を混ぜてこねた後、型を取り油で焦茶色になるまであげたものである。餛子はもち米粉をこねて平らにして切って油で揚げた後、蜜をまぶして炒めた飯粒をつけた菓子であり、茶食は松の花粉と澱粉などを蜂蜜でこね、木型で型取りした菓子である⁽¹⁷⁾。糖果は麦芽で作る高級の飴である。果物は奇数が使われるが、用意する祭器は偶数にする。

脯は短冊状の干肉(肉脯)、スルメやタコ・明太などの皮を剥いた干魚(魚脯)である。かつてはタコの足やスルメには王冠・珊瑚・孔雀の羽といった切り込み細工を施していたが、今日ではほとんどみられなくなった。なおスルメは宇宙の原理を、明太は人類の進化を意味する。醢は米の醗酵飲料である食醢が供えられる。

一方、餅(トッ)はソルギトッ(甑餅)を用いず、主として緑豆白餅・小豆白餅・黒胡麻白餅などが使われる。特に茶礼に用いられる餅は、ソル茶礼には搗餅の一種であるトックック(白餅のお雑煮)が、秋夕茶礼にはソンプيون(松餅)が供えられる。なお白餅は清らかで完全体・長寿を、トックックは厳粛・清潔を、松餅は充足・包容力や和合・調和を意味する⁽¹⁸⁾。

炙は今日の塩焼きに類似するもので焼肉の一種であるが、その材料によって肉炙・魚炙・鶏炙の3つに分かれる。肉炙は牛肉を厚さ1~1.5cm、幅7~8cm、長さ20cm程切りそろえ、両面に切り込みを入れて味付けした後、3~5枚を串刺しにして焼いたものである。魚炙は魚(石首魚が重宝される)を1尾あるいは3尾をまるごと蒸し、フライパンで焼いて用いる。その際に元の形が損なわないようにひっくり返すことはしない。調理された魚は頭が東向きに、お腹が位牌の方に向くように供える⁽¹⁹⁾。魚炙は魚の他にアワビやサザエも切らずに3~5枚を串刺しにして蒸した後、味付けをしてから焼いたものを用いることもある。その他、鶏肉を用いた鶏炙もあるが、鶏は頭や足、内臓を取り除き蒸し焼きにしたもので、背中が上になるように四角の器に盛る。かつては肉炙・魚炙・鶏炙の3つを用意し、3回の献酌の際にそれぞれ順に取り替えたが、今日ではひとつだけを供えることが多い。こうした炙は供犠(生贄)の意味をもつ。

煎は「煎油魚」とも呼ばれ、牛肉や豚肉(肉煎)あるいは白身魚(魚煎)を10~12cm長さに切りそろえ、野菜と一緒に串刺しにして小麦粉と卵のころもで焼いたチヂミの一種である。豆腐を用いることも多い。祭礼日には、煎の油焼きの匂いに導かれ降神するといわれる。肉や魚は天産と呼ばれ、煎と炙を合わせて器の数を奇数にする。なお、煎は炙から発達したものである。

湯は今日のスープであり、チゲのようなものであるが、牛肉に昆布・干魚(石首魚・鱈・明太など)・豆腐などを一緒に入れて煮込み、具だけをそれぞれ別々に盛りつけ、肉湯・魚湯・蔬湯にする。その際、汁は用いないのが一般的であるが、地域によっては汁を用いることもある。湯の数を1・3・5の奇数にし、材料としては牛肉・魚・鶏肉が用いられるが、特に鶏湯は「鳳湯」と呼ばれ、元来は鶏

肉ではなくキジ肉が使われていた。肉湯・魚湯・蔬湯の3湯は天・地・人を意味し、5湯（3湯+鳳湯・雑湯）は五行を意味する。

ナムル（熟菜）は、ワラビ・桔梗・豆モヤシなどの3色の野菜を茹でて和え物にし、ひとつの器に盛るか、あるいはそれぞれ別々に用意することもある。秋夕には白菜・きゅうり・若かぼちゃなども青野菜ナムルとして用いられることが多い。また豆モヤシ・ほうれん草・春菊などは湯通しをしてから和えるが、ワラビ・若かぼちゃ・きゅうり・桔梗などは塩もみをしてから炒めて和える。他方、キムチは唐辛子を使わない水キムチを用いる。桔梗は道（道義）を知ること、モヤシは戒めを、豆は悟りを意味する。

最後に、飯（御飯）と羹（スープ）についてみよう。忌祭時には大盛りの白飯が用意されるが⁽²⁰⁾、ソル茶礼・秋夕茶礼時には白飯ではなく、それぞれトックックと松餅によって取って代わられる。そのため、ソル茶礼は「トックック祭祀」と、秋夕茶礼は「松餅祭祀」とも呼ばれる。羹（スープ）は主として牛肉と大根を薄く四角にスライスしたものでつくるが、魚や野菜のスープも用いられる。飯と羹は祭需（食事）の最も基本的なものである。

一方、祭需として使ってはいけないとされるもの（儀礼食におけるタブー）も存在する。その代表的なものが、果物の桃⁽²¹⁾と、魚の秋刀魚・鮪・太刀魚など（いわゆる鱈のない魚で、魚名の語尾に韓国語の「チ」のつく魚）である。

また祭需料理の調味は素材の味を生かした、醤油と塩を中心とした薄味付けが特徴である。今日、韓国における調味料といえば真っ赤な唐辛子とニンニクである。しかし祭需料理には、唐辛子やニンニクの薬味（「薬念」と呼ぶ）は使わず、ネギも避けられる。それは、これらの香辛料には鬼神や靈魂を寄り付かせない効力をもつからといわれる。また色素を利用して華やかな色彩を出してはならず、赤の小豆は用いてはならない。また、祭需は子孫が先に口にしてはならない。

元来、祭需は自作の農産物を用いて、その家の女性たち（主婦を中心に嫁や娘など）の手によって調理されるのが常であった。今日でもその伝統は受け継がれているが、既製品を購入して用いることも増えている。

3 祖先祭祀の儀礼過程

祭祀の儀礼過程（「節次」^{ジョルチャ}）は、特に忌祭や時祭では「三献三酌」方式の祭儀であるが、茶礼では「無祝単献」の方式によってとり行われる。以下、儀礼過程について順を追ってみよう。

①迎神礼

玄関の大門を開け、祭床の後ろに屏風を張って、祭需（供物）を陳設する。家によっては紙榜（紙の位牌）をはるか、祠堂から神主（位牌）を迎えてくる祭儀で、これを「出主」とも呼ぶ（写真9）。

②焚香・降神礼

降神礼は祭主が香炉の前に跪いて正座し、焼香してから再拝後少々退いて立つ。執事は祭主の左右に寄り添い、祭主は再び跪いては起きあがりお辞儀⁽²²⁾を再拝した後、酒を左執事から注いでもらい、それを墓に模した「茅沙」⁽²³⁾に注いでから再び跪いては起きあがり、再拝した後少々退



写真9 忌祭の迎神礼の祭儀

いて立つ。

③参神礼・進饌

参神礼は神位に挨拶を捧げる祭儀で、参記者一堂が跪いて再拝のお辞儀をする。なお、位牌が神主の場合は参神礼を先に行い、紙榜の場合は降神礼を先に行う。その後、左右両執事は「進饌」といって供物を供える。果物などのほとんどの供物は祭儀が始まる前に予め供えておくが、この進饌時の際には2～3品を加える。

④初献礼

初献官は祭主すなわち宗孫が務め、最初の盃をささげる節次である。祭主は位牌の前に跪き、焼香する。左執事から盃を受け取り、右執事に酒を注がせ、茅沙に少しずつ3回に分けて注ぐ。その盃は左執事に渡し、元の位置に戻す。左執事は串焼きの炙を供え、匙箸を正した後、飯椀の蓋を開けてから、祭主をはじめ一同は跪いて正座をする。祝官は祭主の左側で東を向いて正座し、暫くして一同は起立し、祭主は再拝した後、少し下がる。その間執事は盃と炙を片づける。

⑤読祝

これは祝文を読む祭儀である。初献礼が終わり、参記者一同が跪いて正座をすると、祝官は祭主の左側に座り、ゆっくり丁寧に祝文を読み上げる。祝文は祭主が読み上げてもよい。読祝が終われば、参記者一同は立ち上がって再拝する。

⑥垂献礼

2回目の盃をささげる祭儀を垂献礼という。垂献官（祭主の最近親者）⁽²⁴⁾は位牌の前に出て跪いて正座をする。垂献官は左右執事の助けをあおぎ、初献礼と同様のプロセスで行われるが、この時に左執事は再び新しい炙を供える。垂献官は再拝した後下がって立つ。左執事が盃と炙を退ける。

⑦終献礼

終献礼は3回目の盃をささげる祭儀であるが、終献官（垂献官の次の近親者）は位牌の前に跪いて正座し、初献礼や垂献礼と同様のプロセスでとり行われる。その際に新しい炙を供え、再拝した後、少々下がって立つ。他の場合とは、異なってこの時だけはお酒をなみなみに注ぐのではなく、7部程にする⁽²⁵⁾。

⑧添酌礼

添酌礼はまず祭主が位牌の前に進み立つ。祭主は立った

まま盃を取り、右執事に酒を注がせ、左執事に渡して位牌の前に供える。そして供えられている盃に注ぎ足しの添酌を3回に分けてしてから再拝する。

⑨挿匙正箸

挿匙正箸とは男性の先祖から先に御飯の蓋を開けて匙を御飯の真ん中に差し、先祖が食事をする祭儀である。この時、おかすの供物に左利きのように箸を置くが箸先を少し広げておき、祭主が再び再拝する。

⑩閤門

その後に閤門が行われるが、先祖が供物（食事）を召し上がる時間を与える祭儀である。参祀者一同は部屋の外に出るか、しばらくの間に門（ドア）を閉めてから物音を立てずに少し下がって静かに立ってまつか伏せてまつ。その後御焦げ茶の準備を命じる。

⑪啓門

先祖の食事が終わると、先に祝官が3回の空せきをしてから、ドアを開ける。祭主以下一同は立ち並び整列する。

⑫進茶礼（献茶礼）

進茶礼は執事が羹を退け、そこに御焦げ茶を供える。御飯に差しであった匙をとり、御飯を3回すくいにとって御焦げ茶の中に入れて混ぜ、匙はその中におき、参祀者一同は「邑」（中腰の軽い挨拶）の姿勢をとり、祭主の咳払いに下げている頭を上げ姿勢を正す。

⑬下匙箸（撤匙復飯）

御焦げ茶の中にあつた匙をとり、匙箸入れの匙牒に箸と一緒に戻し、飯碗の蓋をする。

⑭辞神礼

辞神礼は先祖の魂を再びあの世に送り返す神送りの祭儀である。辞神礼は参祀者一同が最後の再拝をしてから先祖の霊を送り出す。辞神礼が終わると、祝官は儀式的終わりを告げる「礼成」という声をあげて儀式的終了を告げ、まず盃を片付ける。その後、祝官は祝文を燃やし、位牌を祠堂に納めるか紙榜の場合にはそれを燃やす。

⑮撤床

祭床のすべての祭需を下げるが、後ろから順番に下げる。

⑯飲福

最後に、飲福の儀礼的共食の祭儀が続く。飲福は家や地方によって異なるが、まず祭主および参祀者がお酒をいただくことから始まる。その後、湯や羹に御飯を混ぜ、肉炙・ナムルなどを入れて「クッパブ」（スープ御飯）にするか、



写真10 祖先祭祀の飲福料理

御飯をナムルで混ぜて「ビビムパップ」にして、祭需飲食と祭酒が供される。これをもって祭祀はすべて終わる（写真10）。

4 祖先祭祀の飲福範囲による分類

祖先祭祀後の飲福過程では祭需（供物）を家族や親族のみならず、近所や村中の人々を呼んで、一緒に食べる共食も行われている。表1はD里61戸の1年間の忌祭を対象先祖別の回数を示したものである。

表1 忌祭の対象先祖別の回数

対象先祖	回数	対象先祖	回数
父	37	曾祖父	12
母	27	曾祖母	12
祖父	23	高祖父	7
祖母	23	高祖母	7
計	149	その他	1

当該村落では飲福の範囲によって、①村付合飲福（父母の忌祭と時祭）、②近所付合飲福（祖父母～高祖父母の忌祭）、③家族のみ飲福（茶礼）、という3つに分類される。①村付合飲福は父・母の忌祭と時祭時の飲福慣行であり、村中の全戸が対象となるが、通常各戸から最高齢者1名が飲福に呼ばれる（写真11）。表1によると、まず当該村落における父母の忌祭は総計149回の忌祭のうち64回である。また時祭は忠壮公派門中の下位の8小グループ（「チバン」と呼ばれる）で祀られており、それらの時祭の回数は8回である。次に、②近所付合飲福は父母以外の忌祭時の飲福慣行であり、平均して隣近所の3戸の全世帯員が呼ばれる。全149回の忌祭のうち、父母の忌祭64件を除いた85件がこれに当たる。最後に、③家族のみ飲福は茶礼時の飲福慣行であり、茶礼は61戸のうち39戸で祀られている。祖先祭祀時の飲福慣行は、表2の大宗家（門中の代々の長男家）の対象先祖別の祭祀費用の差から、祭祀別の祭需の規模や飲福慣行の範囲がうかがい知ることができる。



出典)「晋州市彰烈祠祭享2008」晋州城市管理事務所より
写真11 村人による飲福

表2 大宗家の対象先祖別の祭祀費用

祭祀種類	茶礼	忌 祭					時祭
		父	祖父	曾祖	高祖	不遷位	
回数	2	1	2	2	1	2	1
費用(万円)	20-25	30	15	15	15	40-50	40-50
負担	宗家	宗家	宗家	宗家	宗家	宗家	位土

こうした祖先祭祀の飲福慣行によって、村人は日常食では口にできなかった肉料理や魚料理を中心とした良質の動物性蛋白質を摂取しうる機会を得ることができる。では、祖先祭祀の飲福慣行によって、はたして村人はどれほどの周期で共食に預かることになるのだろうか。

①村付合飲福（父母の忌祭と時祭）では、まず父母の忌祭時の飲福慣行による共食人数＝件数×（分配対象戸数＋平均世帯員数）、すなわち64×（61＋3.0）＝4096人である。さらに、時祭による共食人数＝件数×（分配対象戸数＋平均世帯員数）、すなわち8×（61＋3.0）＝512人である。それゆえに、村付合飲福による食物分配の共食人数は延べ4608人となる。次に②近所付合飲福では、共食人数＝件数×分配対象戸数×平均世帯員数、すなわち85×4×3.0＝1020人となる。さらに③家族のみ飲福では、共食人数＝茶礼挙行戸数×平均世帯員数×（ソルの3日＋秋夕2日）＋年始回り戸数、すなわち39×3.0×5＋61＝646人である。

したがって、当該村落における1年間の祖先祭祀による儀礼食の摂取対象人数は、①②③を合計した延べ6274人となり、毎日約18人が祖先祭祀の儀礼食の飲福に預かることになる。当該村落の人口が186人であるから、村人1個人は祖先祭祀の飲福慣行によって約10日に1回、良質の動物性蛋白質が供給されることになる。

考察

元来、韓国における祖先祭祀の対象は先祖⁽²⁶⁾の靈魂すなわち神としての祖霊であった。しかし、朝鮮時代以来の儒教の影響により、すべての人間は先祖から始まるという儒教の先祖崇拜に基づき、個性をもち続ける先祖を対象とする祖先祭祀に変容し、現在に至っている。特に祖先祭祀は儒教の大伝統に則って、儒教の教えを行為に表した典型的な儀礼として、祖先祭祀を行うことによって、その教えを体得することができ、それが社会的評価にもつながる。そのため、韓国人にとって祭祀を祀る「奉祭祀」は、客をもてなす「接賓客」とともに重要な生活規範になっている。

今日の韓国における食生活の規範は、儒教を国是とした朝鮮時代に確立され、儒教的規範の下に各家庭を中心に実践され、今日に至っている。特に通過儀礼の諸儀礼は厳格な規範が形成されており、宗家の家では兄弟の家族が参集し、4代に及ぶ祖先祭祀をはじめ、さまざまな通過儀礼が儒教の教えに基づき、頻繁に行われている。そのため、祖先祭祀における祭需の儀礼食研究は、韓国の伝統的な食文化を知るうえで、主要な対象である。



写真12 良質の動物性蛋白質の肉や魚料理が並ぶ祭祀供物

韓国人は1人で食べることを嫌い、「食事は皆で集まってするものだ」という意識が強く、特にお祝いや祖先祭祀の際には家族や親族のみならず、近所や村人が一緒に食べる。とりわけ祭祀供物には韓国文化の歴史的経過とその特徴が反映されており、日常の食事ではほとんど口にしない肉料理や魚料理を中心とした良質の動物性蛋白質を摂取しうる機会となっている。祖先祭祀は今なおしっかりと維持されているが、少子高齢化や新興宗教の影響もあって変化も起こりつつある。また外食や肉食の日常化に伴って儀礼食における共食の意味が半減し、供物の数や量も減少傾向にある。そのため、今日では一部の儀礼（婚礼・還曆など）を除き、儀礼食による食物の贈答交換機能がほとんど喪失してしまった。

祭需の料理は、その季節に良いもので最も一般的な食材が用いられ、さまざまな調理法を駆使し、その数（24-32品）も多い（写真12）。頻繁な儀礼を通じて粗食の日常食と、ご馳走の儀礼食を組み合わせることによって、季節に応じた栄養を補い、そのバランスをとってきた。韓国では、こうした食による健康維持という考え方（医食同源）が発達している⁽²⁷⁾。また季節や地域によって祭需共食はビビムバブやクッバブの形をとるが、そこでは祭需料理では忌避されている唐辛子やニンニクによる味付けの調味を加えてから一緒に食される。いわば祭需（儀礼食）を美味しくいただくための工夫として、ビビムバブやクッバブがあみ出されたのである。

一方では、祖先祭祀の儀礼から日常の食生活におけるタブーや禁忌が形成されている。その代表的ないくつかの例をあげれば、生者に対する再拜、御飯とスープ茶碗のあべ

こべ、御飯に匙をさす行為、酒の注ぎ足しなどの行為は日常生活では禁忌となっている。

ところで従来の研究では、祖先祭祀は血縁の紐帯強化機能だけが強調されてきた。しかし、祖先祭祀を食（儀礼食）という側面からみると、当該村落の祖先祭祀の飲福慣行にみられるように、儀礼食の共食慣行は村落社会における人間関係の維持強化の機能をはたしている。村落社会における儀礼食の共食慣行を含む贈答交換は村落全体の互惠的生活互助交換の一輪として機能しており、祖先祭祀には血縁紐帯の強化機能のみならず、地縁紐帯の強化機能としての重要な役割をも合わせもっていることわかる。したがって儀礼食の贈答交換は、村落社会の生活原理・秩序形成における統合の誘発メカニズムとして働いているのである。

注

- (1) 韓国では通例「喪礼」という言葉が使われており、それには葬礼と一部の祖先祭祀の祭礼が含まれている。
- (2) 今日では冠礼はなくなり、婚礼に吸収・統合されている。
- (3) 調査対象村落であるD里に関する調査地概要については林在圭1998:45-56や2011:17-29を参照されたい。
- (4) 『朱子家礼』は、中国の明朝時代（1368-1644）に丘濬が家庭儀礼に関する朱子の学説を集め、冠婚喪祭の四礼に関する礼制・礼法を定めた礼書である。朝鮮時代に朱子学が国家政教の基本綱領として確立され、その遵守が強要される。初期には王家と朝廷の重臣から士大夫（両班）に、さらに一般庶民にまで普及・普遍化することになる。
- (5) しかし、民間信仰の巫俗においては供養によって個性が浄化され、祖霊になると考えられている。したがって、韓国の祖先観には二重構造をもつ。
- (6) 茶礼という名称は朝鮮時代の『朱子家礼』には記載されておらず、茶礼の形式と類似するものとして「参礼」と「薦新礼」がある。参礼と薦新礼は常日頃に行うべき儀礼（通礼）として祭礼に含まれている。しかし参礼は正朝（元旦）や毎月1日と15日、冬至などに祠堂に参拝する儀礼であり、薦新礼は清明・寒食・端午・中元・重陽などに、祠堂でその折々の時食（季節ものや初物）を供え、参拝する儀礼であった。こうした参礼や薦新礼が茶礼に統合・吸収されたものと思われる。なお、参礼や薦新礼は祠堂で行うことが定められ、主婦や長女など女性の参与が認められているが、茶礼は一般に母屋の大床間（大庁）でも行われ、女性の参与は排除されている。また参礼には時食や別饌はなく、薦新礼だけに時食を供える。
- (7) 先祖の墓は日本のように家墓ではなく、基本的には1人1人の土饅頭の個人墓であるが、地域によっては夫婦墓（合葬）もある。
- (8) 門中に関する詳細は林在圭1998を参照されたい。
- (9) 祭儀は命日の前夜12時頃から夜明け1時の間に皆が寝静まった静かな時間帯に行われたが、近年では決められた時間にはこだわらず、命日の前日日が暮れたらいつでも適当な時間帯にとり行うようになっている。
- (10) 父の忌祭には母も一緒に祀り、母の忌祭には父も祀る。このように韓国では、夫婦を単位に兩位を一緒に祀る「合設」の慣行が原則となっており、1973年施行の四礼を簡素化した「家庭儀礼準則」にも夫婦とも亡くなった場合には、兩位を祀る合設が原則となっている。
- (11) しかしこの原則は必ずしも一貫した慣行とはいえない。当該宗孫にとつての5代祖は、傍系にとつても一律に5代祖であるわけではなく、上位世代の傍系にとつては依然として4代祖である場合が生じるからである。こうした場合に、世代が最も高く、かつ最年長者が自分の家に4代祖の位牌を移奉して祀る形式も普及しており、それには当該先祖の祭祀田である位土の問題も絡んでいる。
- (12) 親尽とは代尽とも呼ばれるが、忌祭を祀る代数が尽きたという意味であり、日本の弔い上げに相応する。
- (13) その代表的なものとしては、調査地には榴谷墓園、桑洞墓園、箭洞墓園などが造成されている。特に榴谷墓園は派祖以来代々の長男系の小門中である宗家宅によって、1991年に造成されたものであり、散在していた歴代宗孫の墓を1971年頃から、榴谷という小高いところに移転し、夫婦兩位（あるいはそれ以上）をひとつの墓にして祀っている。この共同墓地の名称は地名に因んで名付けられ、現在派祖の祖父母をはじめ、12の墓が祀られている。
- (14) 時祭の費用は各位牌についている祭祀田の位土から賄われるが、たいがい位牌当たり600-800坪の水田からなる。最近になって共同墓園の造成が進み、墓ごとに供物を用意せず、位土からの収穫の一部は門中の宗会費用にまわすことが可能になっている。
- (15) 元来、『礼記』には夫婦共祭と明示されており、『朱子家禮』にも垂献官は主婦が務めるとある。しかし、実際には女性（主婦）が務めることはごく一部にすぎない。それは朝鮮時代の内外法（すなわち男女有別）の思想の影響によるものである。
- (16) 最近になって、祭りなどにおいて家で醸す家醸酒が復活する傾向がみられる。
- (17) 元来の茶食は茶葉を粉にしてお湯を注いで飲む点茶の意であるが、名称だけが残り、その内容の実態は変わっている。
- (18) 餅は穀物調理において御飯炊きに先行する食物で、その歴史は古く土着性の強い食物である。土着信仰を背景とする豊作祈願の諸儀礼、災いを防ぐための祭儀、家族の平安と除厄を祈る家内信仰（家宅告祀）、通過儀礼などの様々な家庭儀礼や年中行事、堂祭・堂クツの村落信仰等における最も重要な神饌である。特に白餅は神聖を象徴するものとして、また小豆や黍を用いた赤餅は厄払いの意味が込められている。
- (19) 地方や家によっては逆もある。
- (20) かつては御飯にクッス（麵料理）も添えたが、今日ではほとんど供えなくなった。
- (21) 桃は鬼神を追い払う逐鬼の効力があると信じられ、屋敷地内には桃の木を植えることを禁じ、祭需にも供えてはならない。
- (22) 韓国における正式のお辞儀（礼）は「ジョル」と呼ばれ、跪き両手と頭を床に着けて行うものであり、再拝とはジョルを2回繰り返すことを意味する。
- (23) 茅沙とは、砂を入れた器に数本の茅を小さく束ねてものを差したもので、壺の依代になるものである。
- (24) 垂献官は地方によって主婦が務めることもある。その場合、主婦は再拝ではなく、4回のお辞儀をする。
- (25) 祭祀の儀礼過程のなかで、炙をあげる順序は家によって異なり、最初から各種の炙を供えておく場合もあるが、当該村落の忠社公派門中では初献、垂献、終献の後にそれぞれ肉炙、鶏炙、魚炙の順に供える。
- (26) 韓国では「祖先」という言葉は使われていない。
- (27) 医食同源（薬食同源）に関しては林・秋野2005を参照されたい。

参考文献

- 秋野晃司2000『アジアの食文化』建邦社
 崔吉城1993『韓国の祖上崇拜』礼典社
 全京秀1992『下沙美の祭祀と飲福』『韓国漁村の低開発と適応』集文堂
 林在圭1998『韓国における『門中』の構造と機能—忠清南道宜寧南氏忠社公派門中を中心に—』日本村落研究学会『村落社会研究』第5巻第1号、45-56頁
 林在圭2000『門中の構造と祖先祭祀—忠南桃李里の忠社公派門中を中心に—』社会人類学研究室『日本・中国・韓国現代社会の基礎構造に関する実証的比較研究』199-220頁
 林在圭2004『韓国の食文化』『アフラシア』現代アジア・アフリカセンター、10-12頁
 林在圭2011『韓国における日常食の特徴と基本パターン—忠清南道一両班村落の事例を中心に—』『静岡文化芸術大学研究紀要2010』第11巻、17-29頁
 林在圭・秋野晃司2005『韓国における副食文化の変容と健康食ブーム』食生活研究会『食生活研究』Vol.25-2、12-18頁
 林在圭・秋野晃司2006『韓国の祖先祭祀における食文化』『女子栄養大学栄養科学研究所年報』第14号、45-54頁